

負けへんで 川本幸民

テレビのクイズ番組を家族で見ているとき、「次はビールが日本にやってきたころの問題です」と出題者が切りだしたので、「しめた」と思った。つい最近、日本のビール誕生の秘話を知ったばかりだったからだ。ここは一発正解を出して、家族に自まんしてやるうと身を乗り出した。しかし、問題は「明治初期にビールはどこで売られていたか」というものだった。私は知らなかった。正解は薬局である。ビールに含まれるアミノ酸やビタミン、ミネラルがじ養強そうによいとして薬のあつかいだったそうだ。

ひろうしそこなつた私の知識は、日本で初めてビールをつくった人と、そのいきさつだった。時代の先く者とも呼ばれたその人の名は川本幸民。三田藩の藩医の三男として一八一〇（文化七）年に生まれ、藩主にその才能を見出され、緒方洪庵などと共に学んだ蘭学者である。

黒船が浦賀にやってきてからというものの、日本中はただただ西洋の進歩とそのすさまじさにおどろき、幕府も町人もおそれ入ってばかりだった。しかし、早くから蘭学を学んでいた幸民はちがった。

幸民が西洋の書物をほん訳し、自らの知識を生かしながら試作・実験したものは数知れない。銀板写真機、マッチ、電信機、白砂糖精製法、近代的塩田開発、色ガラス、蒸気船、鉄の船、そして飛行機など、当時の日本人が、とても我々につくるのは無理だと考えていた西洋の代物を、次から次へと研究していった。

さらに幸民は西洋の文明から新しい言葉を考え出している。「化学」「午前・午後」「水蒸気」「大気」「気象」といった、今では私たちがふつうに使っている言葉も、かれが考案したという。

この幸民のすさまじいばかりの研究熱は、かれの知的好奇心ばかりによるものではない。それは、三田藩始まって以来のしゅう才といわれたかれを見出し、学費をえん助し、江戸に送り出して学問をさせた藩主九鬼隆国の恩に対する深い感謝の思いの表れでもあった。兄の死で川本家をつぐために、江戸での学問をあきらめ、故郷に帰ろうとする幸民に隆国は言った。

「家のことは心配するな。余が後ろだてをする。その方は、学問にはげめ。西洋の学問はおそろしいほどに進んでいる。自分の出世や栄達のためではなく、この国のために学問にかん然といじめ。」

幸民には、この隆国の言葉に報いようという強い決意があった。さらにその決意は、日本人の一人として「西洋に負けるものか」という幸民の思いに火をつけた。

幸民はてっ底的に研究し、実績を残した。かれの業績は広く世に知られるようになった。実学の功績が認められて、一八五九（安政六）年に西洋の兵法や技術を研究するために幕府が設けた「蕃書調所」の教授になった。幸民はそこでもいっそう研究にはげみ、数多くの洋書をほん訳し、西洋の最新の学問や技術を次々としょうかいした。かれは蘭学者として日本の第一人者になっていった。

しかし、日本でビールを初めてつくったのが幸民だということを、私は知らなかった。そのいきさつが、いかにもかれらしい。

ペリーが、幕臣との会談で日本にはない飲み物をふるまったことを耳にした幸民は、「よし、自分もつくってやろう!」
と思い立ったのである。

自分が飲みたいわけではなかった。黒船のうわさが出るたびに、「所せん、西洋にはかなわな」と、人々が口にするのを齒がゆく思っていた幸民である。ペリーだ、黒船だと聞くと、燃えるものがあつた。

黒船が去ってから、幸民はドイツの本を取り寄せ、研究し実験を繰り返した。十分な用具などあるはずもなかったが、自分の庭に炉を築き、そろわない材料は、知人に用意してもらったり、代用品をつくったりした。

苦心してつくり上げた念願のビールは、こいこはく色をしていた。そのビールを、西洋に追いついたという思いで幸民は味わつた。

よほどこのビールづくりに、日本人を悲觀的にさせた黒船に対する対こ意識があつたのだろう。派手なふるまいが苦手で、人付き合いも苦手な幸民が、

「盛大に試飲会をやろう!」

と言ひ出した。そして、呼べる限りの蘭学者の仲間などを浅草曹源寺に招き、盛大な試飲会を開き、かれのつくつたビールをふるまつた。

ビール完成のうわさは、あつという間に世間に広まつた。幸民は、ゆ快にビールの話をしていゝる江戸の人々の様子を、いつになくやさしい目で見つめた。

日本でもビールをつくることができるという情報は人々のはげみになった。飲むことができなくても、多くの人たちに勇気をあたえたのはまちがいない。こつして日本人が自信をもつことこそ、幸民が望んでいたことだろう。

洋学の研究で時代の先く者となり、数え切れないほどの業績を残してきた幸民だが、このビールづくりにこそ、かれの思いの原点があるように思う。

幸民自身が西洋技術を研究して製作した銀板写真機でさつえいしたかれのしょう像がある。眼光するどく負けん気の強さがにじみ出ている。

日本が鎖国から開国に歩を進めようとしていたあのころ、かれと同じように、「西洋に負けてなるものか!」

と、新しい時代にいどんだ多くの人々がいた。

その熱い思いのかたまりが、その後の日本の発展の原動力になつたのだと、そう思った。

本資料の著作権は兵庫県教育委員会に帰属します。
本文のすべてまたは一部について無断で複写して使用することを禁止します。